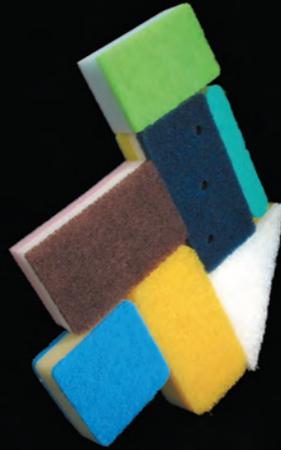


# 美術フォーラム21

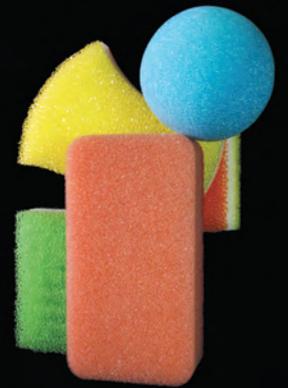
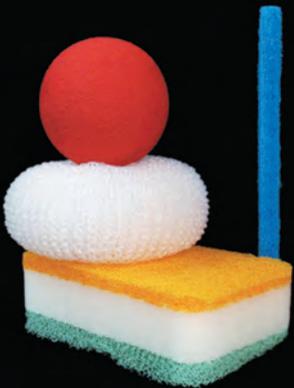
Bijutsu Forum 21 / 2023



特集

## フォトグラフィック・アート

技術と芸術のあいだ



vol.47

資料紹介

スミソニアン・アメリカ美術館におけるラリー・J・ウェスト・コレクションとロバート・ドラプキン・コレクション  
…… ジョン・P・ジェイコブ／佐藤守弘訳

特集

フォトグラフィック・アート——技術と芸術のあいだ……

I 写真は技術か芸術か

1 内燃機関と写真術——ニセフォール・ニエプスの「自動性」の概念について……

2 ダゲレオタイプ、そのいくつもの歴史——十九世紀ダゲレオタイプの多様性と現代におけるビン・ダンの試み……

3 最初で最後の写真論?——ロドルフ・テプフェールの「ダゲール板について」(一八四二)をめぐる……

II メディアウムを超える写真

4 写真×絵画／工芸／映画——複合メディアとしての彩色／色彩写真……

5 オスカー・G・レイランダーが残したもの——初期芸術写真におけるユーモアと表情……

6 光村利藻と鹿島清兵衛——写真と印刷……

7 須田国太郎の写真と絵画——滞欧期(一九一九～一九三三)を中心に……

8 須田国太郎のカメラと写真——二十世紀前半のカメラ史から……

Ⅲ 自律性と社会性のはざまのモダン・フォトグラフィ

9 ラジオ放送と新興写真——中山岩太が語る「アマチュア写真講座」……………松實輝彦 78

10 ドキュメンタリーのリリシズム——ウォーカー・エヴァンスのポエティックス……………高村峰生 84

11 「運動」としての写真——〈全日本学生写真連盟〉と「集団撮影行動」……………竹葉 丈 90

12 一九七〇年前後における平敷兼七の写真について……………倉石信乃 98

Ⅳ 素材としての写真／概念としての写真

13 写真メディアの現在地——「見るは触れる 日本の新進作家 vol.19」より……………遠藤みゆき 104

14 スクリーンショット論——ポストモダン以後の写真／アート／日常……………前川 修 110

表紙解説

表 鈴木崇《BAU》……………佐藤守弘 116

裏 島村逢紅《眼鏡と洋書》……………奥村一郎 118

執筆者紹介…………… 120

英文要約……………キャロル・モーランド訳 123

# 特集 フォトグラフィック・アート——技術と芸術のあいだ

佐藤守弘

現代において「写真は芸術か」という問いには、あまり意味がないように思える。というのも写真とは、報道、司法、科学、記念などさまざまな機能を果たすものであり、芸術はその機能のひとつに過ぎないからである。写真が登場した十九世紀はもとより、映画からテレビ、現代ではさまざまなデジタル画像など写真のないイメージの幅はますます広がっている。そんな中で芸術と関わりを持つ写真イメージは、写真実践のほんの一部を占めるに過ぎない。それでもなお、写真と芸術の関係を問う言説は、黎明期からそのメディアにとり憑いてきた。写真術の公開から二十年程経った一八五〇年代末期の初期芸術写真の取り組みと、それを例に挙げながら写真を「諸芸術の**下婢**」<sup>(1)</sup>に過ぎないと言いつつ放ったシャルル・ボードレーの批判を思い起こしてもいいだろう。とはいえボードレーの断言にもかかわらず、写真というメディアが芸術実践において重要な位置にあるのも確かである。本特集では、このように錯綜した写真と芸術の関係に新しい光を当てることを目標とする。

ここで題の「フォトグラフィック・アート」について、少しばかり説明しておきたい。写真発明者のひとり、ウィリアム・ヘンリー・フォックス・トルボットは、写真文集『自然の鉛筆』(一八四四〜四六)冒頭に

「Brief Historical Sketch of the Invention of the Art」という文を記した。その「the Art」を本特集寄稿者でもある青山勝は的確にも「写真術」と訳し、文中では「技術」としている。発明の段階において、写真とはまさに新しい技術に他ならなかったのだ。そもそも英語で *techné* は元来「技術」という意味で使われていて、それが「芸術」という意味で使われるようになるのは、早くとも十六世紀末期であった。<sup>(2)</sup> 日本語においてはそれが「技術」「芸術」と訳し分けられることで、対立するとは言わないまでも明確に分節された概念を指示している一方、ヨーロッパ系言語ではそれらは分節困難で、文脈によって使い分けられている。よって本特集では、あえて「フォトグラフィック・アート」という「写真技術」とも「写真芸術」とも取

れる言葉を使うことで、技術と芸術の間に宙吊りになりながらも、それぞれの概念を揺さぶってきたメディアの歴史を問い直すようにするのである。ではここで、写真と芸術の関係を概観してみよう。<sup>(3)</sup> 写真の黎明期、その撮影で生活していた人たちにとっては肖像や科学イメージなどの実利的な写真を撮ることこそが第一であって、売買する市場もない芸術的な写真をわざわざ撮る動機はなかった。一方

で一八五〇年代になると、アマチュアにも写真術は

広がっていく。まず目指されたのが古典的な絵画の主題や構図に範をとった芸術写真であった。それに對して十九世紀終盤には印象派などの前衛芸術に呼応するようになり、さらに写真表面を加工することで絵画的効果を与えるようになっていく。

そうした**絵画主義的傾向**に反発するように二十世紀前半に現れてくるのが、写真のメディア固有性に目を向けて、絵画などとは違う写真独自の視覚に芸術性を求める方向性であった。そうした写真のモダニズムが第二次世界大戦後、北アメリカを中心に定式化されていくなかで、写真市場も形成され、写真を収集・展示する施設も登場してきて、芸術／表現としての写真は、絵画や彫刻などの美術とは一線を画した自律的制度のなかで育まれていくこととなった。とはいえ、一九八〇年代以降、ポストモダンの状況のなか、写真を素材として使うアーティストや概念として写真を問い直す写真家の登場で写真と芸術の制度的境界は曖昧になっていき、相互浸透していく。

このような一般的な写真史認識に、さまざまな角度から批判的に切り込んでいくのが、本特集の目指すところである。本特集は写真の歴史をおよそ時代順に追いつながら、四部で構成される。第一部は、写真の発明に至るまでの時期から、ダゲレオタイプの時

代までを扱った三論文からなる。青山勝は、写真の発明者のひとり、ニセフォール・ニエプスが「自動性」という概念を自身たちによる写真と世界初の内燃機関の発明に共通する概念として見出し、見出したことに注目して考察する。新井卓は、ダゲレオタイプの歴史の複数を指し、かつ現代におけるダゲレオタイプの可能性を探る。橋本一径は、世界初のコマ割マンガ家として知られるロドルフ・テプフェールがダゲレオタイプ批評において、対象との「同一」性という点で写真の独自性を認識していたことに着目して評価する。

第II部では、写真と芸術の関係が表面化する一八五〇年代からの、いわゆる「芸術写真」の時代について扱う。とはいえ、ここでは従来のように芸術がどのように絵画芸術を範として目指したのかと問うだけではない。佐藤守弘は、彩色／色彩写真を採り上げて、そこに見られる写真と他のメディア——絵画、工芸、映画——との複合に注目する。甲斐義明は、初期の芸術写真家、オスカー・G・レイランダーが、写真によって捉えようとした「ユーモア」や「表情」に後の芸術写真には見られない独自性を見出す。岡塚章子は、十九世紀の終わりに「写真道楽」と言われた光村利藻と鹿島清兵衛がともに写真の印刷という事業に取り組んでいたことの重要性を指摘する。また本特集では、画家の須田国太郎が一九一九年から二三年のあいだ、ヨーロッパに滞在した時に撮影した写真を紹介する。湯浅ひろみは、それらの写真を整理・分類して、写真史に位置づけようと試みる。井口芳夫は、須田が遺した二台のカメラからその写真の特徴を探る。

第III部においては、写真の自律性、メディアウム固有性が追求され、その枠内での表現が追求された一九三〇年代から七〇年代が対象となるが、ここではむしろ写真と社会の関係が前景化されるだろう。松實輝彦は、日本の新興写真を代表する中山岩太によるラジオ講座のテキストを分析した上で、ラジオという大衆に広く届くメディアを紹介することで人びとに新たな写真のイメージを届けた可能性を示唆する。高村峰生は、ウォーカー・エヴァンスが、ドキュメンタリー写真に「詩／リリズム」を求めていたことを、テキスト、写真の分析から解きほぐしていく。竹葉丈は、六〇年代後半の日本の大学での写真部／サークル活動に目を向けて、そこでの「集団撮影行動」の写真史上の意義を問う。倉石信乃は、沖繩出身の平敷兼七の写真の構図や被写体の選び方の精緻な分析から彼の社会的風景を読み解いていく。

第IV部で組上に上がるのは、現在の「写真」を巡る状況である。写真のデジタル化やネットワークでの流通の結果、旧来の光学的・化学的な「写真」が死に瀕する一方で、写真の、よ、う、な、も、の、は、さ、ま、ま、な、メ、デ、イ、アに寄生して、社会のあらゆる部分で繁茂している。遠藤みゆきは、写真イメージと支持体の関係を問う三人の現代作家の実践を採りあげて、現代における私たちとメディアを取りまく状況を検討する。前川修は、私たちがコンピュータやスマートフォンで日常的に「撮って」いるスクリーンショットをリメディアイトされた写真として捉えつつ、その生産や流通における物質的、身体的次元を考察する。

本号では、特集だけではなく「資料紹介」では最近

スミソニアン・アメリカ美術館に収蔵されたアフリカ系アメリカ人の初期写真群を、「現代作家紹介」では気鋭の作家、金サジの写真作品を採りあげること、雑誌全体として写真を研究対象として扱うことができた。本号が現代における写真研究の最前線の一端を示すことになれば幸いである。

なお最後に、本号の編集体制について追記しておきたい。本号から「美術フォーラム21」の編集・発行者が一般社団法人美術フォーラム21から公益財団法人きょうと視覚文化振興財団に移行したことに伴って、編集体制が刷新された。すなわち、新たに、毎号、視覚文化研究会が組織されて、特集テーマや執筆者について議論し、その議論を踏まえて、編集委員会が編集を行うかたちとなった。今号に関しては、左記の研究員によって研究会が組織され、佐藤がその成果を取りまとめ、特集担当委員として編集委員会に参加し、特集の編集にあたった。

「二〇二二年度視覚文化研究会A研究員」

岡塚章子、佐藤守弘、松實輝彦、湯浅ひろみ

註

(1) シャルル・ボードレール「一八五九年のサロン」阿部良雄訳、『ボードレール全集』Ⅲ、筑摩書房、一九八五年、三〇八頁。

(2) ウィリアム・ヘンリー・フォックス・ストルボット「自然の鉛筆」青山勝訳、赤々舎、二〇一六年、二〇頁。

(3) "art. n. 1." ウェブサイト OED: Oxford English Dictionary, Oxford University Press, 2023. <https://www.oed.com/view/Entry/11125>. 最終アクセス: 二〇二三年四月二九日。

(4) 拙稿「写真と芸術——写真はいかにアートを指したのか」『美学会編』『美学の事典』丸善出版、二〇二〇年、四九四〜四九五頁、および増田展大「写真と現代美術——アートはいかに写真に回帰したのか」(同、四九六〜四九七頁)を参照のこと。

ptionskurve ist demnach  
die Naturaufnahme  
deutungen, die am  
en Vorstellungen, sind  
fang des Naturobjekts  
existiert bisher nicht.  
sten Doppelschichtfa  
sonders auf den  
unter Bromkalzusat  
ausentwickelt der  
nisse natur  
rund der Unst  
Laboratoriumsprüfung  
erklären. Die Sachlage  
die Mittelstöne, so kom  
ber die Lichterdetal  
ich kurz so we  
eren aber al  
bildwiche  
de Kom  
hältnismäß  
nur einen  
Methode, mit  
- und Schatte  
siers unterzubringen  
er Syngraphie  
daß es nunmehr  
elichten und Ent  
Der einfache, die  
urve ist S-förmig  
Negativkurve umge  
die ganzen einsch  
ht-Druckverfahren  
s eine möchte ich  
kontrastreichen  
leich bei der Auf  
r einzigen K

Stark überschätzt wird derzeit der Wert einer ganz beson  
emeinempfindlichkeit. Man erkennt Zusammenhänge mi  
edsucht. Gewiß gibt es Fälle genug, wo die kürzestmögliche  
erwünscht ist. Indes ist die Lichtstärke der Objektive doch  
hen, daß sie in verhältnismäßig nur seltenen Fällen voll au  
man sonst überbelichten würde. Da brauchte man also eige  
möglichste Allgemeinempfindlichkeit gesteigerten Film gar nich  
nerische Arbeiten sind jedenfalls andere Eigenschaften  
te Farbenempfindlichkeit in der richtigen Steigerung un  
beiden Begriffe sind ausgezeichnet untereinander vereinb  
men. Raum aber läßt sich das allerfeinste Bromsilberkorn  
ndlichen Emulsion beibehalten. Und doch ist es für  
wichtig, daß die Emulsion frei von allen gröberen Bestand  
Bestrebungen mit besonderen oder überhaupt verdünnt  
zusammenballung der Silberausscheidungen zu vermeid  
ollen Erfolg, wenn von vornherein schon in der Emulsion  
hen sehr klein und fein verteilt waren.  
In Deutschland ist inzwischen das DIN-Verfahren ei  
Kampf und den unlauteren Reklamewettlauf um die  
tsgrade ein  
Ansprü  
Der Praktiker wird an  
Seine Wünsche gehen  
der Farbe  
d charakte  
Anschaffung  
ja aber nicht einmal die  
mäßige" Photographie bestimmt  
rungen besitzt, zu äußern. Was  
Uns interessiert  
s, die sich bei der  
versinken, wenn sie  
oder reproduziert zu  
sicht S-förmig. Um  
zu machen  
Kurvenstück  
Die bildmäßige Photographie fordert eine der Natu  
kommende Helligkeits  
der Kurve gewährleistet. Folglich ist der untere  
s „bildmäßig" bedeutungslos. Es wäre viel zwe  
ang bei 0,3 über dem Schleier vorzunehmen, an eine



9784925185769



1921370023002

ISBN978-4-925185-76-9  
C1370 ¥2300E  
定価 2,530 円(税込)